

日本YMCA同盟

THE  
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.855 2026

2026年4月1日発行（毎月1日発行）  
1947年10月27日 第三種郵便物認可  
本体価格45円（外税）（送料63円）  
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟  
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号  
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641  
URL：https://www.ymcajapan.org/  
発行人／太田直宏 編集人／横山由利亜



YMCAせとうち「ピンクフォトラリー」より

OPINION

## 「こどもがまんなか、あたりまえ」

日本YMCA同盟 総主事 太田直宏

日本語の「権利」に使われている「権」の字には、権威・権力など「力」を行使するようなニュアンスがありますが、「権利」の原語である「Rights」は、正しいこと、筋がとおっていること、正当な道理をいい、「力」の意味は含まれていません。かつて福沢諭吉はこの「権利」という訳語に警戒感を抱き、あえて「通義」と訳し、これに「あたりまえ」という振り仮名をあてました。そう考えるとウクライナやパレスチナの戦時下で暮らす子どもたちは「あたりまえではない」状況に置かれており、世界のYMCAは「あたりまえ」を取り戻すために、連帯して活動しているといえます。



目を国内に転じてみると、日本で暮らす子どもたちもまた「あたりまえ」とは言いえない状態に置かれていることに気づきます。先日、全国各地のYMCA責任者が集まる「総主事会議」に、こども家庭庁の鈴木太地さん（長官官房参事官（総合政策担当）付主査）をお招きし、日本のこどもたちの課題について共に学びました。増え続ける不登校やいじめ、さらに2025年の児童生徒の自殺者は532人と最多を記録するなど、「あたりまえ」が守られているとは言い難く、少子化の広がりも深刻です。

こども家庭庁は2023年、それまで文科省や厚労省などに分散していたこども政策を一元化し、行政の「隙間」にあった課題（居場所、貧困、自殺対策など）に対応する司令塔として発足。「こどもまんなか社会」をスローガンに、こどもの視点に立った政策を立案しています。「こども家庭庁はまだ新しい組織であり、現実に即した政策を立案するためには、YMCAのように最前線で支援を行う団体からのフィードバックが不可欠です。現場の課題を国に届けていただき、共にこどもまんなか社会を実現していきたい」。鈴木さんの熱いエールに感動したひとときでした。

「子どもたちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」（マルコによる福音書10：14）。

この聖句は、イエスの所に集まってきた子どもを追い払おうとした大人に対してイエスが語った言葉で、子どもを無条件に受け入れる大切さを示しています。社会で最も小さい存在である子どもを大切にすることのあり方を示しているとの解釈もあります（共著「奪われる子どもたち-貧困から考える子どもの権利の話」より今井誠二）。子どもの「あたりまえ」が守られる共同体こそが、一人ひとりの尊厳が守られる共生社会の実践であり、YMCAがめざす「ポジティブネットのある豊かな社会の実現」につながると私は考えています。

国内外で「あたりまえ」が奪われている子どもたちのニュースが絶えない今、「こどもがまんなか、あたりまえ」を実践していくため、行政や他団体、そして何より全国YMCAの皆さまと共に手を取り合って、歩んでいきたいと願っています。

第17代日本YMCA同盟総主事 おた ただひろ 太田直宏  
2026年4月より、新総主事として就任しました

**略歴**  
1960年生まれ  
1984年 関西学院大学法学部卒業  
株式会社オービック入社  
1986年 神戸YMCA入職 予備校、野外・健康教育、地域活動ほか担当  
1991年 岡山YMCAへ出向 野外・健康教育を担当  
1995年 岡山YMCAへ移籍（阪神・淡路大震災の影響で）  
2005年 岡山YMCA第4代総主事に就任  
2013年 岡山YMCAが「公益財団法人YMCAせとうち」となり、代表理事に就任  
2026年 第17代日本YMCA同盟総主事に就任

▼日本基督教団岡山信愛教会 教会員  
受洗は1988年 日本基督教団宝塚教会で  
▼主事論文「YMCAミッションステーション構想  
具体化に向けて～仕合せなネットワーク  
型社会実現のために～」1996年

**他団体での役職等**  
川崎医療福祉大学 非常勤講師  
岡山野宿者支援NPOさすな理事  
岡山キリスト災害支援室役員  
日本キャンプ協会ディレクター  
岡山ワイズメンズクラブ会員

戦禍を逃れて4年

## 「避難いつまで」 「祖国もう帰れない」

# ウクライナ から日本へ

2月21日、特別フォーラム「戦禍を逃れて4年 ウクライナ避難者が自ら語る“いま”“これから”」が開催され、ウクライナ避難者48人、日本人支援団体・支援者、メディアら112人が出席しました。ウクライナ避難者は、公的な財政支援が終了し、就労、日本語、メンタルなど課題を抱えながら、自立を迫られ、厳しい生活を送っています。一方、4年という長期間の異国での暮らしが、意識の上にも影響を挙げ、日本での定住を考える人が増えてきています。



フォーラムでは、独自のアンケート調査を元に日本YMCA同盟より全般報告、続いて6人の避難者から問題提起や近況報告が行われました。後半は、「私たち日本社会が問われていること」と題して、行政や支援団体の第一線で活動する日本人が応答のパネルディスカッションを行いました。

昨年は、停戦について一時希望的な観測があり帰国した避難者もいましたが、本国の攻撃は激化し、インフラも機能せず、再来日する人が続いています。戦況が改善されないまま、日本での財政支援が終了したことで、小さな子どもを抱える母親、高齢者、障がい者などが、困窮、孤立に陥る心配もあります。「日本に長く住みたい」と考える避難者に、今後、どのような支援が必要なのか。精神面でのサポートや地域での見守り、仲間づくりができるような働きかけも求められています。

YMCAでは、専門機関とも連携し、伴走支援を継続していきます。このウクライナ避難者支援を一つのケースとして、地域で、特に外国ルーツの子どもたちとどのように共生していくことができるか、YMCAとして更に深めていきたいと願います。

日本YMCA同盟 横山 由利亜



## 横浜YMCA × ウクライナYMCA オンラインミーティング 「前を向いて生きるために」

横浜YMCAは2月28日、ウクライナのYMCAとオンラインでつなぎ、現地の声を聴く会を実施。日本で暮らすウクライナ避難者や会員など40人が参加しました。

ウクライナYMCA同盟のビクトリア・トロフィモア総主事によればキーウ近郊は、「昼夜を問わずに警報がなり、停電も頻繁に起きる。日々緊張を強いられ、PTSDを抱える人も多い」。その中でYMCAは、メンタルヘルスサポートや仕事を失った人への就労支援を行ったり、子どもたちへはいまも継続してキャンプを提供したりと「人間性を失わず、前を向いて生きることができるよう活動を続けている」と語られました。

横浜YMCAからは、日本で暮らすウクライナ避難者の支援活動について報告。地域における居場所「みどりクラブ」では、母国語での会話を楽しみ、健康維持のための体操などを行っています。自然の中でリフレッシュプログラムに参加している様子も紹介されました。

YMCAのキャンプなどに参加している子どもの母親ムリヤフカさんから、「YMCAの活動はただの余暇活動ではありません。子どもらしい時間を取り戻す喜びの活動です」と感想が述べられると、ウクライナ側からも賛同の声があがりました。

横浜とオデーサYMCAのユースの交流から始まった今回の企画は、暗く不安な状況でもYMCAは、思いやりやユーモアを大切に、小さな光となる活動をしていこう、互いに励まし合いながら平和な世界を築いていこう、そんなエール交換のひとつとなりました。

横浜YMCA 石川 晴美



## 第22回 日韓大学YMCA交換プログラム “AI時代における平和” 共に考える

隔年で、日本と韓国の学生YMCAメンバーが交流する「学生YMCA日韓交流プログラム」が2月26日～3月1日の3泊4日、ソウルで開催され、日本の学生14人と韓国学生11人が参加。「AI時代におけるわたしの平和、世界の平和」をテーマに語り合いました。



学生たちはAI時代に自分たちが感じている困難や不安を共有したほか、学生街に出て街頭インタビューを実施。回答を基に韓国の若者たちが抱える精神的不安とSNSとの関連性についてAIを使って分析し、議論を深め、最終日には「第22回日韓大学YMCA共同決議文」を作成。日韓の青年として、「より速くではなく、より安全に、より尊厳をもって、より共に生きるための原則をたて、連帯していく」とした10の原則を提案しました。

参加者からは「じっくり語り合う中で言葉の壁を乗り越えられた」「AIについてここまで真剣に考えたのは初めて。周りに伝えていきたい」等の声が聞かれました。プログラムはテクノロジーを駆使しながらも、最終日には明け方まで語り合い、手書きの手紙を交換していた学生たち。「交流」のツールは変わっても「つながりたい」「共に生きたい」という日韓の学生たちの姿に、平和を築く若者たちの力を感じた4日間でした。

日本YMCA同盟 福田 奈里子

## #ピンクシャツデー

### いじめストップへ、 全国5万人余がアクション

学校におけるいじめの認知件数が過去最多の77万人となる中、YMCAは今年も2月4水曜日前後にピンクシャツデーを開



ピンクシャツデーを学ぶ子どもたち(名古屋YMCA)

催。ピンクの服でいじめ反対をアピールしたほか、各地で勉強会などが行われました。地域の学校や企業、行政との協働も進み、北海道YMCAとつながりのある和菓子店はピンクシャツデー限定のお饅頭を販売。大阪の梅花教会は「ピンクシャツデー礼拝」を行うなど、運動の輪も広がっています。

文科省によれば、いじめの件数は増えているものの重大事態の増加率は減るなど、早期発見・早期対応には一定の効果があると報告されています。YMCAは引き続き「いじめストップ」の風潮を広め、子どもたちを被害者にも加害者にもしないよう取り組んでいきます。

<https://www.ymcajapan.org/campaign/pinkshirtday/>

